



半蔀

第一号 平成29年4月1日

「半蔀」(はしとみ)

◆原作ストーリー

この曲の典拠は『源氏物語』の「夕顔」の巻です。ある日、光源氏は五条あたりの草の茂る古びた家に白く咲く夕顔に目をとめます。その花を所望すると白い扇に、心あてにそれかどぞ見る白雲の光添へたる夕顔の花という歌が書き添えられていました。その歌に心惹かれた光源氏は、寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔と歌を返し、夕顔と密かに交際するようになります。その当時、六条御息所のもとへ通っていた光源氏は、気位の高いその性格とはまったく違う頼りなげでおおらかな夕顔に心惹かれていくのです…。

◆宗家の語る見どころ

「半蔀」は、原作の暗いイメージを感じさせない夕顔の花の精のイメージのあるたいへんきれいなお能です。六条御息所の生霊にとり憑かれ息絶えてしまうのですが、このお能では怨霊は出てこないし、怨霊によって殺されたとも言いません。原作とは異なり、夕顔が源氏と出会えた喜び、昔のよい思い出を語る優美で明るい作品です。お能は歌舞伎や演劇と違い、簡素化された空間で物語が展開していきます。能の世界では舞台に置く道具のことを「作り物(つくりもの)」といいます。夕顔と瓢箪をつけた 蔀戸(しとみど)を模した作り物はこの曲独特のもので、夕顔が蔀戸を竹で押し上げ、喜びを表した優美な序の舞を舞った後に、またその奥にこおもて消えていきます。ここでは清楚で若い女性の印象の「小面(こおもて)」を使用します。装束も明るい白を身に着け、白く美しい夕顔をイメージしているのでしょう。同じ題材とする能の「夕顔」では、つける面や装束が変わってきます。またこの曲は内藤某によってつくられたものですが、この名前は「半蔀」にしか出てきません。これほど人気のある曲を書く人の名前が他に出てこないのもミステリアスな気がします。

※小書(こがき)に「立花供養(りっかくよう)」と書かれると、最初に舞台正面に立花が供えられ、そこに夕顔の花を添える特殊な演出があります。

※小書…通常の演出とは異なる演出のことで、番組の曲名の横に小さく書かれています。

